



東日本大震災の遺族のスピリチュアリティ 『私の夢まで、会いに来てくれた』における 夢の語りのテキストマイニング分析

いとうたけひこ・宇多仁美
 (Takehiko ITO, Hitomi UDA)

和光大学 (日本、東京)

要旨: [目的] 夢は死者の遺族が本人とコミュニケーションできる機会である。災害の遺族が離別後にどのような夢を見て死者と再開するのかを明らかにする。[方法] 夢のインタビュー記録『私の夢まで会いに来てくれた』に掲載された 27 篇の夢についての語りをテキストマイニングにより分析した。[結果] 出現頻度が多かった単語は、名詞では「一緒」「震災」「津波」「夢」などであり。動詞では「いる」「一緒」「思う」「見る」「言う」であった。また、係り受けの頻度分析や評判分析により夢の特徴が明らかにされた。[考察] 夢を見ることにより、亡くなった家族や現在も行方不明の人・友人などがそこに一緒にいる気配を感じ、会うことができたり、この世とは思えない体験、魂や本来見えないものの世界を体感し、夢と現実のはざまを実感することから遺族は亡くなった人との魂とともにこれから未来に向かう目的や新たに芽生えた価値観、前向きに生きるための方向性を見出すことができることを示した。

キーワード: 夢、東日本大震災、テキストマイニング、津波、スピリチュアリティ、あいまいな喪失

1. 問題

2011年3月11日14時46分、マグニチュード9.0とする地震が東北地方を中心とする特に福島県、宮城県、岩手県、茨城県の4県に多大な被害を及ぼした。最大震度は7であった。それに伴い津波、原発の放射能漏れ、家屋の倒壊により、東北のほとんどの人々が避難を余儀なくされた。

震災から7年経過した現在、死者15895人(地震による直接死)、行方不明2539人、災害関連死3645人(2018年6月29日復興庁訂正発表)今現在も震災により家族、友人など、かけがえのない大切な人を失った遺族は悲しみや喪失感、そして自分たちだけが生き残ったことへの罪悪感を抱えながら生きている。

遺族にとって夢とは亡くなった人と会うことができる唯一の方法である。遺族が夢を語ることにより生じる、遺族のこれからの生き方の変化とスピリチュアリティとの関連を明らかにしたい。

2. 目的

本研究は東日本大震災によって被害にあった遺族が見る亡き人の夢への思いや語りについて、テキストマイニングを通して分析する。そしてスピリチュアリティと曖昧な喪失という観点から結果を検討する。

3. 方法

3.1 分析対象

東北学院大学震災の記録プロジェクト金菱清(ゼミナール)編(2018)『私の夢まで会いに来てくれた: 3.11 亡き人とのそれから』(朝日新聞出版)の書籍である。この書籍に記述されている27編を分析対象とした。

3.2 分析方法

東北学院大学災害の記録プロジェクト金菱清(ゼミナール)編(2018)「私の夢まで会いに来てくれた」3.11のPDFファイルをPCソフト「読取革命ver15」で文章ファイルに変換、タブ区切りテキストにしてExcelファイルにしたものを「Text Mining Studio ver6.1.1」により、テキストマイニングの手



法を用いて分析を行った。分析は、テキストの基本統計量、単語頻度解析、係り受け頻度分析、評判抽出、注目語分析、原文参照の順に行った。

3.3 倫理的配慮

すでに公表され、市販されている書籍の内容を用いた分析であるため、倫理的配慮は著作権に配慮する他は特に必要がない。

4. 結果

4.1 基本情報

分析対象の本書の遺族の語りの総数は 27 編であった。次に 1 編あたりの文字数の平均は 3393.2 文字であった。27 編全体の総文数は 2715 文であり、各文の平均字数は 33.7 であった。延べ単語数は 19821 個、単語種別数は 4492 個、タイプトークン比は 0.226 であり、同じ単語が繰り返し出現する傾向があった。

4.2 単語頻度解析

名詞では「一緒」と「震災」「津波」「夢」という単語が頻出した。動詞では「いる」「一緒」「思う」「見る」「言う」の出現回数が高かった。

4.3 係り受け頻度分析

係り受けとは主語と述語の関係、修飾語と被修飾語の関係、補助の関係、並列の関係といったように、文章の中で単語と単語がどのようにつながっているかを示す関係のことである。

今回は名詞と動詞との関係を分析した。この分析で津波の夢や、亡くなった人と夢の中で話す、聞く、声をかける、金縛りなど、夢を見た時の状況、夢の内容（津波、地震、死）などの表現が見られた。

4.4 評判分析（ポジティブ・ネガティブ分析）

評判分析では本書に含まれている単語をその単語に係り受けする好評語（ポジティブなイメージをもつ単語）と不評語（ネガティブなイメージをもつ単語）の頻度上位 20 を抽出した。「夢」という単語が高い頻度で好評語と不評語両方で抽出された。

好評語では夢に現れた「人」（家族、友人など）、「仲」（関係性）、「話」、「つながり」、「遺体」、「運」が抽出され、不評語では「気持ち」、「思い」、「言葉」、「体験」、「状態」、「震災」、「被害」、「波」、「外」が抽出された。

不評語では「気持ち」、「思い」、「言葉」、「体験」、「状態」、「震災」、「被害」、「波」、「外」が抽出された。

4.5 注目語情報分析

注目語情報分析では、「夢」という単語について分析をする。「夢」という単語がどのような単語と受け取り関係にあるのかを図 4 に示した。特定の単語と結ばれている単語を明らかにし関係性をみて

いく。

「夢」に対して、「あの世」、「この世」、「前向き」、「生きる」、「一緒」、「津波」、「震災後」がすべて関係性を示した。

5. 考察

5.1 本研究の結果のまとめ

本研究の分析結果から特徴的だったのは単語分析や係り受け分析から抽出された言葉が繰り返し出現しており、「一緒」、「見る」、「思う」、「いう」、「話す」、「感じる」、「気持ち」、「遺体」、「そば」夢を通して遺族と同じ時・空間・つながり体験しているを示した。

評判分析では、「夢」が好評語、不評語の両者で最も多く抽出された。これは、震災後に行方不明だった家族や友人などを探し続けている中での夢（遺体発見前）と死亡が確定したときの夢（遺体発見後）が異なっていたことから両価的な結果となったためと考察される。

また、好評語に「遺体」が抽出されていたことから遺体発見後はポジティブな夢、遺体発見前はネガティブな夢の内容であったことが両価的な結果となった要因であると考えられる。不評語に「人」、「波」、「震災」、「被害」、「状態」が抽出されていたのは津波による影響が反映された。

注目語情報分析では、夢と関連性のある言葉の結果より、「あの世」、「この世」、「感じる」、「いる」、「魂」、「語る」、「生きる」、「前向き」、の関連性が抽出された。ここからは夢の中で亡くなった人との再会や現実ではない世界を示すスピリチュアリティとの関連を示す結果が読み取れる。

5.2 窪寺のスピリチュアルケア学との関連

窪寺 (2004) はスピリチュアリティの説明として、「スピリチュアリティとは人生の危機に直面して『人間らしく』『自分らしく』 生きるための『存在の枠組み』『自己同一性』が失われたときに、それらのものを自分の外の超越的なものに求めたり、自分の内面の究極的なものに求める機能である。」としている。

窪寺は「超越的存在とは神仏など自分の人生を支配・保護していると感じている存在。その存在を自覚すると新たな視野が開かれたり、価値観・人生観が変えられて自己執着などから解放され自由を経験する。究極的存在との出会いは、自分の中の新たな自分を発見すること。それによって、新たな生きがいや人生の目的をつかむ」と述べている。この観点から本研究の結果を分析することとする。

大震災という危機に直面した遺族が体験した生命の危機はスピリチュアリティを覚醒させる。遺族



が見た夢の語りの中で、スピリチュアリティと深く関連する特徴的な語りを原文参照する。

「姿は見えないけれど、そばにずっと見守ってくれている。」「夢の二人は魂の姿」「HもYも家族として生き続けていく」「自分のように亡くなった人を抱き誰かと話したいという人はたくさんいるはず。そんな人のために気兼ねなく話せる場を作りたいと考えた」

「あっちの世界で楽しそうにしているんだな」「震災後に支援してくれた感謝と亡くなった人の気持ちを舞台を通して少しでも伝えることができたらと思っている」

「死ぬ限界はどこにあるのか」「家族に頑張れと応援されているように感じる」「夢を通じて何らかの使命感を感じる」「死生観が変わった」「供養とは何かを教えられた」

夢を見ることにより亡くなった家族や現在も行方不明の人、友人などがそこに一緒にいる気配を感じ、会うことができたり、この世とは思えない体験、魂や本来見えないものの世界を体感し、夢と現実のはざまを実感することから、遺族は亡くなった人との魂とともにこれから未来に向かう目的や新たに芽生えた価値観、前向きに生きる方向性を見出すことができることを示した。

震災から7年が経過した時点で、いまだに行方不明者の家族は曖昧の死と向き合わざるを得ない日々を重ね続けている。

また、大切な人を失った遺族は死別の苦しみと生き残ってしまった人間として苦しみ、助かった安堵感を感じることに罪悪感とともに生きてきた。その中で見た夢を語ることで、後世に亡くなった人の魂とともに語りつぐことの意義は大きい。

5.3 あいまいな喪失

仲本(2018)によれば日本人の遺体に対する態度として、えひめ丸事件の遺族は金銭的な「補償よりご遺体との対面が重要との強いご希望」であったことを指摘している。このことはBossのいう「あいまいな喪失」に対しての日本人独特の心情を表している。

本研究の結果においても、このことが確認された。津波によって遺体が即座に確認されるのは稀なケースであった。流されて行方不明になり、後に遺体(しかも多くの場合は体の一部分や遺品のみという形で)が見つかる事が多く、その時の気持ちが面接でしばしば述べられていた。遺体との対面により夢の内容が変わり、故人が夢に出てくる回数が激減した場合もあった。つまり、あいまいな喪失の状況下では夢による対面でこころを癒していたのかもしれない。悲嘆の状況の中で故人が夢に現れるということは、故人が遺族を助けることなのか、残されて生きている本人が故人を呼び寄せるのであろうか?あるいは、夢というこの世とあの世の境界が曖昧な場面で、遺された本人の意志から離れた現象がたち現れるのだろうか?國分(2017)がいうように能動的な行動でもなく受動的な意志にも帰することのできない「中動態」の状況に当てはまるのかもしれない。遺体と対面して喪の儀式を行った後は、このような曖昧な喪失から一歩進んで、夢の内容も変化していくのである。

5.4 本研究の限界と意義

本研究の限界は、分析の対象が27編という限られた対象で行っており、量的な不十分さは否めない。このような制約の中での分析ではあるが、本研究では震災で亡くなった遺族の夢の語りからスピリチュアリティおよび、あいまいな喪失との関連性の存在を明らかにすることができた。

文 献

- Boss, P. (2000). *Ambiguous loss: Learning to live with unresolved grief*. Harvard University Press.
- 窪寺俊之 (2004) 『スピリチュアルケア学序説』 p 8、p 10
- 國分功一郎 (2017) 中動態の世界: 意志と責任の考古学 医学書院
- 仲本光一 (2018) 外務省医務官としての二十五年間: 法人支援の現状と課題 世界と議会, 580, 16-34.